

**トークライブ「科目連動で教える金融経済」**  
**名古屋市立大学大学院経済学研究科 准教授 横山 和輝**  
**(聞き手) 東京証券取引所 金融リテラシーサポート部 課長 石田 慈宏**

まず、科目連動とは何かについて説明します。

科目連動とは、科目の垣根を、教科書の設定を超えた学びのことを指します。例えば、社会科で町の人口の推移や産業の発展などを、算数で習うグラフでまとめたり、英語で洋楽を聞いたり、先生方自身にも記憶があるのではないのでしょうか。

科目連動で教えることの意味は、科目が体系立っている意味を理解し、どのような時にどのような知識が役立つのか知ることです。科目の基礎を体系立った知識として学び、積み重ねたものを日常生活へ活かすことができると思います。また、科目連動で教えることにより、物事に多様な見方があることを知ったり、苦手意識をなくし、得意分野を伸ばしたりできる効果もあるでしょう。この効果は、算数は苦手だけど社会科が好きだからグラフ作成を覚える、といったことだけでなく、社会科が苦手だけど算数が得意な生徒さんがグラフ作成で協力できるなど、役割分担を通じて得意科目を活かし合う効果も期待できます。

次に、数学と経済教育の関係について、歴史を踏まえ解説します。

様々な金融史の言葉から、昔は小学校で金融教育、特に複利計算が教えられていたことが分かります。この計算で使われていたのはそろばん。戦国時代～江戸時代初期に普及したと言われています。

ビジネスとして商人や建築で土地測量を担う人、暦の作成をする人には、算数やそろばんの技術が必要だったのは想像できると思います。

そういう人たちだけでなく、漁民や農民にも計算技術が必要でした。特に徳川時代は、耕作地面積によって税を納める時代。測定に間違いがないかどうか、自身で確認する必要がありました。面積計算が生活に必要なのです。また、土地を担保に借金をする場合も、金利（複利）の計算が必要でした。

つまり、商売人でなくとも、計算の知識が生活に必要不可欠だったのです。また、算数を通じて経済を知ることもできました。

そこから少しずつ変化します。明治維新後、西洋から色々なものが、特に理科・算数の知識についてそれまでの日本で培われたものとは全く異なる知識体系が導入されます。西洋での計算手段は筆算でした。つまりそろばんを使う珠算とは全く違うわけです。よって明治維新を前後して、小学校・中学校でそろばんではなく、筆算を教育する流れが高まることになります。やがて時代が進むと、そろばんだけでなく筆算も学んだ人が教師となり、次第に筆算が浸透していきます。

筆算が浸透すると、次第に複利計算がしづらくなります。何度も手書きを繰り返す筆算とそろばんとは、前者が圧倒的につらいわけです。こうしたつらさを和らげるものとして、複利表での計算が教えられるようになります。複利表は単純な掛け算に置き換えるための手段ですから、**複利計算**で必要だったはずの反復の計算をせずに済むのです。

さらに、文部科学省が公布した 1941 年の国民学校令で、経済と結びついていた**算数が、理科と並行した科目として定義**されます。終戦後の学習指導要領からは、小学校から複利の記載がなく、教えられなくなりました。

このように、算数の歴史を辿ると、社会と理科とのせめぎ合いが伺えます。現在でも、科目をどうやって教えるかは試行錯誤していて、同じような壁にそれぞれの時代で直面していることが分かります。直面したものに適応していくものもあれば、失ったものもあります。

経済教育、特に金融教育の重要性は、金融の大切さを訴えるのではなく、分野横断的に、かつ長い目で見えることを教える 1 つのきっかけになると考えます。

1960（昭和 35）年池田勇人内閣が国民所得倍増計画を公表した際、所得を 10 年で倍にすることがスローガンとされました。10 年間で倍、これが 1 年間で何%成長を意味するか、複利計算に抵抗がなければすぐに計算できます。この計算をイメージできるかどうかは、今何をすべきかビジョンを立てる際に大きく影響します。

それ以前に、10 年後、という時間感覚は随分と長期のビジョンです。こうした長い目で見ることの大切さは、現代の状況をあまりに重視すると忘れがちになってしまいます。つまりせつがちになってしまうということです。国民がせつがちになると、長期の展望や見通しに対して政策を掲げようにも国民の同意が得にくくなっているように思います。これは会社で言えば経営方針についても同様のことが言えます。

歴史を辿ると、長期ビジョンを描きやすかった高度成長期の人たちは、時期的に最後の金利教育を学校で受けていたのではないかと思います。**長い目で見ると金利の面白さと怖さ**を、小学校の時に勉強している世代と言え、それによって長期的な思考を培っていたのではないかと考えます。

**金融経済を、長期の展望や見通しを描ききっかけの 1 つ**、と捉え、授業に取り入れてもいいのではないのでしょうか。学校現場では金融経済を社会科として捉えられがちですが、例えば算数・数学を例に挙げ、分野横断的に教えることもできます。あるいは、社会科の中で分野横断的に算数・数学を教えるきっかけにもすることができます。

(聞き手・石田講師のまとめ)

算数の教育が、実は私たちの経済状況に深く関わっていました。長期的なビジョンを育成するのに、算数の能力が必要だったのです。しかし、経済と算数の結びつきが、いつの間にか理科との結びつきになり、経済と算数が切り離されてしまいました。それにより、長期的なビジョンを持つ能力が、教育から欠けてしまったのではないかと横山先生は示されている、と理解しました。